

狼狩風習に見るモンゴル牧畜民と狼の関係：内モンゴル・アルホルチン旗での聞き取り調査を中心に

ナムジリン・ボルド

(内モンゴル大学モンゴル学院、内モンゴル・フフホート市)

要旨：特に近年において、内モンゴルという大地には狼は殆ど見られなくなった。蒙古地域にはかつて普遍的であった狩猟と狼狩といった伝統風習は消えつつある。本稿では主にニーマ氏の語りに基づいて、かつてアルホルチン地域の狼狩の様子を狩猟方法と実行過程の両面から民族誌的に記述してみた。ところで、狼を神聖視するモンゴル人の従来の狼観が動的な狼狩の中でも巧妙に貫かれていた。同時に狼狩は、草原生態の良性循環のためにも重要な意味を持つ。このような文化的かつ科学的内質を持ったモンゴル人の伝統的狩猟風習は解放後、殆ど排除された。この状況は、内モンゴル今日の野生動物資源の貧弱、特に狼を絶滅寸前にまで追い込んだ根本内因の一つと考えられる。

キーワード：狼狩；狩猟風習；アルホルチン

図書分類番号： C912[.55]

文献表示番号： A

一、はじめに

モンゴルでは狼はモンゴル民族の起源に深く関わっている。モンゴル族の前身とも言われる匈奴は周辺漢民族国家の史書に「犬夷」、「犬戎」などとして知られている。彼らは二頭の白い犬を氏族のトーテムにしていたことからこのように呼ばれるに至った。(D. Sodnam 1987:330)。モンゴルおよび中央ユーラシアの多くの民族の中では狼を口にすることがタブーであった慣習は広く存在した。モンゴル語の中では、keker-e in noqai (野犬) tegri-n noqai (天犬) という名詞は狼を表すものとして使われてきた。このことから上述のトーテムとされる「二頭の犬」というのは狼を指したとも言うべきであろう。またモンゴル人達の間では、『蒼き狼と美しい牝鹿の伝承』や『アロンゴア夫人の感光受胎』などの神話伝承が言い伝えられてきた。まだ činus^①という狼の複数形で氏族名を表すモンゴル人の集団もいた。いずれにせよ、狼にまつわる先祖伝説であることは明白である。

今日に至っても、モンゴル人は狼が『祖獣』あるいは『天神の犬』と神聖視することは普遍的である。しかし、従来の牧畜生業において、家畜の保護に当たって、狼は重要な狩猟対象の一つであった。本稿では、このように狼と深い文化的、精神的関係にあるモンゴル人は、如何なる形でこの狼と共存してきたかを文化人類学の視点から見てみたい。

かつて、内モンゴルの大地にも 20 世紀の 60～70 年代まで数多くの狼が生息していた。本稿は、狼のすでに少なくなった内モンゴル自治区の東北に位置するアルホルチン (Aru-Qorčin/阿魯科爾沁) 旗をフィールドワークの地域とした。当該地域も内モンゴルのほかの地域同様、狼の少なさと生活環境の変化によって狼狩という風習は継続に行なわれ

ていない。急激に変容する牧畜生業の場で、その痕跡を感知することすら難しくなった。本稿は、現地にいる年寄りの記憶の語りと民俗誌的な情報の両方を参照しながら『過去の風習』と化しつつある狼狩を復元的に記述してみた。そこでは、狼を神聖視するモンゴル人の伝統観念が、狼狩という動態的行動の中にも貫かれていたことがわかった。その傍ら、内モンゴルで狼がなぜ激減した理由にも初歩的アプローチを試みた。

二、狼に関する先行研究

モンゴル国（元モンゴル人民共和国）では近年、狼を特定問題にして取り上げて注目を集めている研究として次の二点が挙げられる。即ちハタギン・G・アーキム氏（Хатагин Готовын АКИМ）の ТЭНГЭРИН НОХАЙ — Хөх Монголын хөх чонын тухай үнэн ба домог —（『天神の犬 — 蒼きモンゴルにおける蒼き狼についての真実と神話 —』、ウランバートル 2000 年）と T・ナランフー氏（Т.НАРАНХҮҮ）の МОНГОЛ НУТГИЙН ЧОНО（『モンゴルの狼』ウランバートル：2000 年）の研究である。

ハタギン・G・アーキム氏と T・ナランフー氏の研究はいずれも民俗学的研究であるが、資料の応用の面では両研究は著しく異なった特徴を見せている。前者は神話、伝承、史料、説話および実際にあった事柄を多く紹介した研究である。そして狼とモンゴル文化の関わりについても興味深い詳述がある。その上、モンゴル国で今でも行っている狼狩についても若干言及している。

T・ナランフー氏の研究は自らの 30 年あまりの狩猟経験および長期間の狼への観察に基づいたものである。氏は観察を通してモンゴルに分布する狼に対してその種類、習性、生態および狼の群社会について詳細な報告を行った。モンゴル国は今でも世界で誇りうる野生動物資源の豊富な国の一つである。単に狼だけでも、1989 年の統計によればモンゴル国の国土上、32000 頭の狼が生息して、年間 4000 頭ぐらいの狼は狩られている（Т.НАРАНХҮҮ 2000:54）。

一方、内モンゴルでは、近年になって、民族誌的出版物の著しい増加が、内モンゴルの民族文化と伝統の復活に知的な栄養素を注ぎ込んでいると言えよう。ますます多く出版されるようになった民族誌的な論著の中、狼が登場する記述もそれなりに多くなってきた。例えば(Qadai 1964)、(Qurčabaŋatur and Üjüm-e1991)、(Nrantuyaya1998)、(W. Sayinčoytu 2000)、(Ra・Suke2002)・・・などには狼と関わるモンゴル人の生活誌的な記述が各所にある。そして、日本におけるモンゴル学分野からも(楊 1994)、(二木 1998)、(バー・ボルド 2001)、(小長谷 2004)などが狼の神話やモンゴルの民俗習慣に関わる貴重な知見を提供している。また、Se・Sampilnorbu 氏が生前、民間で長年にわたって採集したモンゴルの諺②からも多くの狼と関係した諺の存在を知り得た。これらの記述はかつて、内モンゴルのモンゴル人の生活および精神世界に、狼は深く関わっていた事実を裏付けるものだと考えられる。

以上紹介したように、狼とモンゴル文化の関係は深いものであるが、その関係の理解に向けた神話学、文学、人類学、および動物生態学などからの多視角的研究は依然として少ないと思われる。

三、調査地域の概要及びニーマ氏について

(一) 調査地域の概要

アルホルチン旗は興安嶺の東斜面からシラムレン川の北岸にわたる内モンゴル赤峰市③に属する。現在の面積は1万4千平方キロメートルで、人口はおよそ30万人で主にモンゴル族と漢族からなる。アルホルチン部族と現在の通遼市行政地域に集住する元ジリム盟のホルチン部とは同一の出自で、皆チンギスハーンの弟、ハボトハサルの率いた部族の末裔たちである。現在、モンゴル族人口は1/3を占め、漢民族はそれを上回る2/3を占める。地図に示された情報を見るだけで鎮、郷、村などと言った漢族農業人口を主とする行政地名が旗政府の所在地の回りには多く見られる。それに対して少々離れたところではソム（モンゴル語の郷に当たる行政単位）やガチャー（モンゴル語の村に当たる行政単位）などの牧畜地域名が示され、南から北まで展開される。農業地域は漢族農民の入植に伴って形成したためアルホルチンの中心町を真ん中に取り囲んだ形で四面八方へと拡大の傾向を見せる【図1】。実際の調査ではアルホルチン旗の中心の町一天山鎮④を出発して、北へ坤都鎮を通り過ぎると農地があまり見られなくなり、目に映る風景は草原地帯が主となる。しかし、近年においてアルホルチン旗を含む内モンゴルの各地域では、『生態移民』⑤や『家畜の圈養』⑥などの政府による生態治理を名目とした政策が推し進められている。このことで地元一部のモンゴル人達は強制的に牧民から『鎮民』にされた⑦。彼等の将来の生活はどのようなものになるのかは今後の観察に委ねたい。そしてこの他、モンゴル言語使用の面から見ると、アルホルチン旗のハーンスム・ソムでは老人や学齢前の子供は漢語を話せない者がほとんどだった。当該地域は内モンゴルで最もモンゴル民族の伝統が維持されているシリングル盟の両ウジユムチン旗と、最も漢化影響の強いとされる通遼市（元ジリム盟）との間に位置し、人々の話す言語はジリム盟の方言と大別され、内モンゴルの西の標準モンゴル語とは近いバーリン方言である。

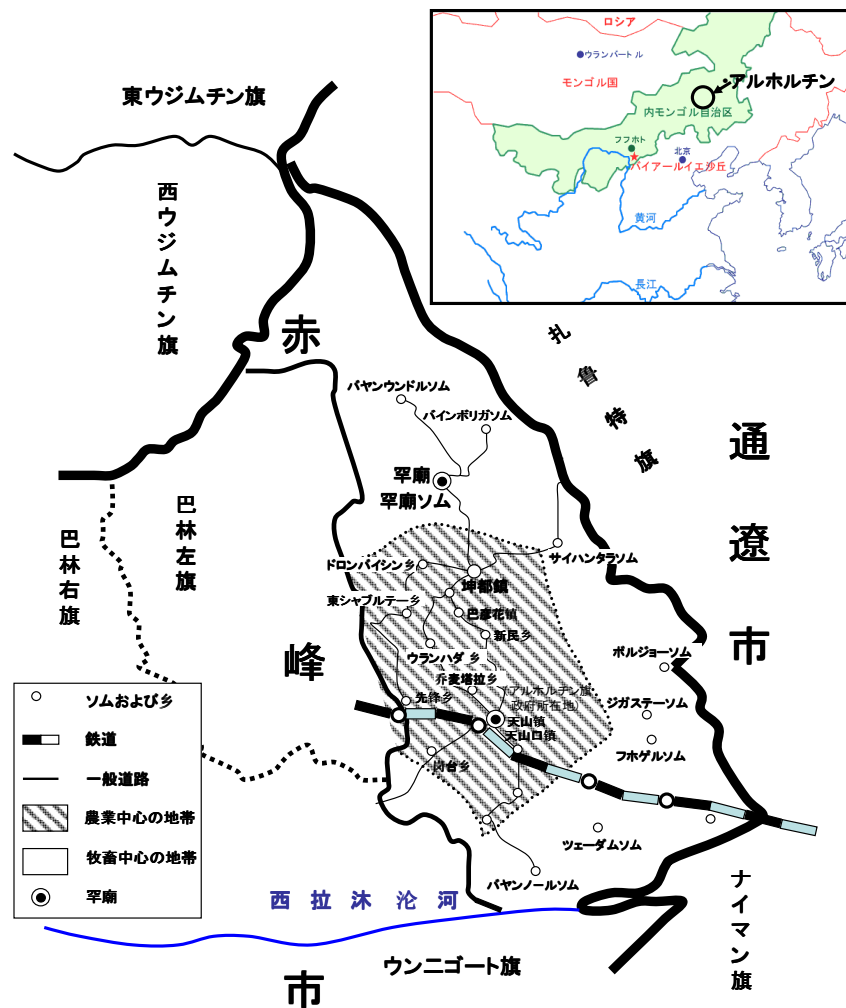


図1 (2003年)現在のアルホルチン旗およびその周辺地図

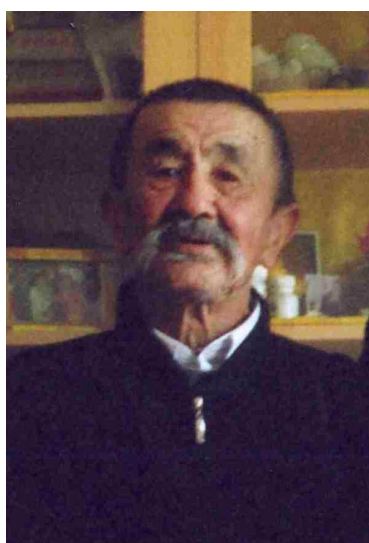
(二) ニーマ氏について

アルホルチン旗での調査において、狼について多くのことを語ってくれた人の一人はニーマ氏【写真1】である。彼の家は先祖代々アルホルチン旗で牧畜を営んでおり、彼自身も若い頃、狼狩をした経験がある。地元の歴史や民俗風習に詳しい彼は、物知りとしてアエル⑧近隣では名高い人物である。彼は一見普通の牧畜民であるが、実際、彼の家柄の歴史や彼自身の74年(2003年当時)余りの人生経歴から内モンゴルの東北地域における過去の出来事の数々が再発見できる。民国、満州国、また、後にできた中華人民共和国各時代のアルホルチン地域の民族習慣や歴史の変容の実態を見る時、ニーマ氏のような老人達の記憶の断片が貴重な証言資料として、歴史の復元に積極的な意味を持っている。

ニーマ氏は1929年にアルホルチン旗の四等タイジ^⑨、ゴーシंगा氏（本名はジンバジヤムツ）の家に生を受けた。このゴーシंगा氏はニーマ氏によると当時アルホルチン旗において旗の防衛任務に当たっていた軍関係の重要人物の一人である。氏は、アルホルチンの人々にゴーシंगा団長と称された。実はアルホルチン近代史にその名がよく知られている。アルホルチンの民謡ではゴーシंगा氏が、アルホルチンで軍と軍馬の募集を行い、西モンゴルの徳王政権^⑩の応援にかけつけた一節が伝えられている^⑪。ニーマ氏は旧満州国時代、塾に通い、日本語も多少習ったという。若い頃、知識人としてソムの秘書、小学校の教師などの役職も経験したことがある。

さらに特筆すべきことは1946年、氏の甥は、内モンゴル

写真1: ニーマ氏（74歳、2003年当時）



の人々の信仰を熱く集める^{ハーン・スム}罕廟^⑫の活佛第八世察汗達爾罕呼圖克圖^{ホビルガン}⑬の転生として現れ、氏の一族はアルホルチン地域社会において最も輝いた。このような家系の事情は中国近代の激動する歴史の中、ニーマ氏の運命を大きく変えるものとなった。

後に、新中国の成立に伴い、社会主義革命の政治運動が次から次に始められた。その結果、多くの人々は家柄成分で区別され、階級改造運動が激しく行われた。ニーマ氏もこの政治運動から逃れることができず、土地改革で「富牧」「封建牧主」と分類され、財産を没収された。文化大革命（1966年～1976年）では人民を騙した「活仏の叔父」、「旧満州の役人」などの名目でまたも酷く批判される対象となり、いつもガチヤアの重役ばかりに行かされた。

現在、氏は安定した老年生活に入り、彼の甥である活仏の住む^{ハーン・スム}罕廟で、少年僧たちの日常生活の面倒を見ながら伝統的モンゴル人通りの祈りの毎日を過ごしている。

【図2】はかつてのアルホルチン地域の狼狩りをスケッチしたものである。手に猟銃と bila ru^⑭（ボロー棒）を持った人々が馬に乗って狼を追い狩る様子が描かれている。ニーマ氏によれば、昔から内モンゴルではどこの地方にも狼はいたという。彼の小さい時、アエルの大人達は馬に乗り、猟犬を連れて、アルホルチン北部に位置するアバガラ山でよく狩猟していたという。その時は今と大分違って、ノタック（生活している放牧地域をさすモ

ンゴル語)の水草は豊富で野生の鹿類、及び小型の獲物ウサギ、タルバガ(草原で穴を掘って住むモルモットの一種)などが多く生息していた。または狼、狐などもよく見かけたという。ニーマ氏は自分の経験として猟犬、ハブハ(挟みわな)、bilaru(ポロー棒)などの道具を用いて、合わせて五頭の狼を狩ったことがあるという。そして、昔よく行われていたアルホルチンの狩猟風習と狩猟法について多くのことを語ってくれた。その聞き取りを次の節にまとめた。

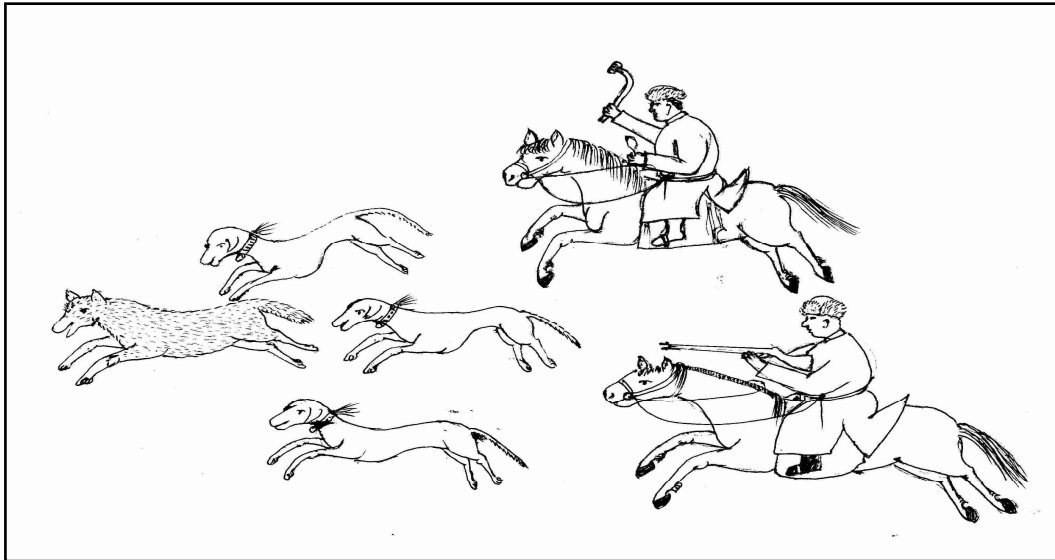


図2 ニーマ氏がスケッチしたかつてのアルホルチンの狼狩の風景

四、狼狩及びその方法

狩猟は自然と共に生きてきたモンゴル族の歴史的過程の中で形成された風習である。かつてモンゴルは地域、部族を区別せず、大体同じような狩猟風習を持っていた。もちろんおかれている自然状況、動物分布、辿って来た歴史により多少異なる場合が生じても狩猟風習自体の機能、儀礼^⑮、構成、守るべきルール、タブーの面から大きな変化は見られない。

次はニーマ氏の語りを主に参考しながら復元したかつてのアルホルチン地域で行われていた狩猟風習を見て見よう。

(一) 狼狩り

狼狩はモンゴル人が行なう狩猟生活における欠かせない一部分である。狼狩を通して狼を絶滅させようということをモンゴル人が一度も考えたはずがない。というのはモンゴル人が狼を常に自らの自然の一部だと認識していたからである。

アルホルチン地域の人々は毎年、陰暦10月以後から狼狩を始める。まず、狩猟を行っても良い日を選んで巻き狩りに出かける。巻き狩りというのは狼や獲物のいる小さい山をとりかこんで、獲物の嫌がる音を立てながらふもとへ追い立て、待ち伏せて狩る方法である。

その日の朝一番、猟銃またはボロー棒を持った人々は狩猟に馴らした各自の良い馬に乗って、猟犬と共に狩りに参加する。一般的に少なくとも十数人は簡単に集まるから狩猟経験の豊富な年上のアンチン(猟師という意味のモンゴル語)から一名を^{ア、ウ、ダルガ}狩猟の長に任命する。

^{あ、ヴ、ダルガ}狩猟の長は儀礼的行為を主催する以外に参加者の役割分担を決め、モンゴル従来の狩猟分配法に従って獲物の分配を行うなどの役割を果せなければならない。この儀礼的行為は1950年代ごろになって社会主義体制が導入されることにつれて、「古い文化」、「古い思想」のカテゴリと見なされ、中断されたとニーマ氏が供述する。

狼は主に険しい山々や人目に見付きにくい岩石の多いところの岩穴に生息する。秋から冬にかけて狼たちは交尾の時期に入り、群れを成して草原を走りまわることが多く見られるようになる。特にこの時期の狼たちによる遠吠えは草原中に恐怖を走らせる。

冬に、アンチンたちは狼のいる山に入り、左右二つのグループに分かれて、ふもとへ獲物たちを追い立てる。最後に、ふもとで集められた狼と獲物はすべて殺されるとは限らない。幼い仔たちと妊娠中の動物は山に返し戻すという狩猟規則がある。規則に反したものは「angčīn(獵人)」という称号は取り消され、「gürügečīn(屠殺者)」と皆から嫌われることも起こりうるのである。

狼は獷猛な獣である。そして、生まれつきの高名な狩人でもある。インディアンの人々は狼を自らと同じ、狩りで生きている『兄弟』と見なし、狼の狩りの腕を賛美する。モンゴル人は狼を勢いの象徴と見なし、狼と野外で遭遇することを「吉」と考える。もし、その場で狼狩りに失敗しても悔しい気持ちにはならない。逆に狐に遭遇して狩ることができなければ気運の不吉を感じて落ち込む。草原の年寄りたちはいつも「狼は自分より勢いの優れたものにしか殺されない」という。事実狼はそう簡単に捕まえられる獲物ではない。

しかし、モンゴル人達はかつて、狼狩りに様々な方法を用いていた。次はアルホルチン地域の狼狩りを重点的に紹介したい。

(二) 狼狩りの伝統的方法

1. 馬と猟犬で狩る(mori noqai ber abulaqu arya)

巻き狩りは遥か昔からモンゴル地域で行われていた野性獣を獲る時の伝統的狩猟法である。十三世紀頃、モンゴル帝国を旅したルブルクのウイリアム修道士はその報告書では次のように記している。「野生獣を獲ろうとすると、タルタル人は集まって一大群れをつくり、動物がいるとわかっている地域をとりかこんで、だんだんかこみを小さくしてゆき、しまいに動物を円くとじこめてから、矢で射します」(カルピニ/ルブルク 1989:148)。

このような獲物のいる地域をとりかこんで行われる狩猟はアルホルチン地域においてはつい5、60年前までは規模の大小を問わずに行われていたという。かつて、アルホルチン旗は、バーリン左右両旗、オーハン旗、オンニユウト旗、ヘシツテエン旗を含むジョウ・オダー会盟(čirulran-)が主催する大狼の猟場でもあった。隣接の旗から二、三日もかけてゲル・猟具と共にアルホルチンのアバガカラ山に獵人や牧民達がやってきていたという。

モンゴル人の遊牧生活全般において馬と犬は欠かせない親密なパートナー的な存在である。チンギス・ハーンは自分の功臣、名將を「馬」と「犬」で喩えるほどである。実際の

巻き狩り式の狩猟行動には馬と犬の果す役割は大きい、どちらか片一方を抜きにしては巻狩が成り立たなくなるからである。そのため、モンゴル人は昔からどんな地理条件でも獲物を追い駆ける良き馬と勇敢な猟犬を育てることだけは怠けない。

良き馬、良き猟犬を育てるためにはモンゴル人は馬と犬の血統にとっても注目をする。良き馬は牧畜地域で値のつけられない宝とされる。モンゴル人の誇りそのものである。特にナーダムやレースで数多く優勝した馬は主人およびその地方に無限な栄光をもたらし、良き血統が認められる。このような血統を引いた子馬は牧畜民に熱く迎えられ、その成長する段階ごとに牧畜民によるユルール^⑩が唱えられ、神々からの加護と祝福を受けさせる。そして、主人の目標ある訓練と丁寧な世話の下で馬は人心をわかるようになり、最後に千頭、万頭になる馬の群れを駆け回る主人の良きパートナーになれる。良き馬は主人と一心同体で、狩猟の時、主人の意図通り獲物を追い駆ける、オルガ（馬竿）で捕殺するなど高度な技に万全な演出をしてくれるのである。

良きアンチンの犬は去勢しないのが普通である。アルホルチン地域では現在狼、狐などの獲物が草原で著しくその数が減ったので草原で猟犬の需要はほとんどなくなった。犬の繁殖およびアエル（ここでは牧民の近隣の家を指した言葉）の雌犬についてしばしば姿を消してしまう犬の行動を制限するため、犬は生後まもなく去勢されることが多くなった。去勢された犬は狼の相手にはならず、「去勢された犬は狼の笑いもの」とモンゴル人はよくいう。

狼のいるどこのノタツクにも猟犬を選別するいろいろな方法がある。モンゴル人は通常冬が一番寒い時に生まれた仔犬はよいという。仔犬を選別する時、耳あるいは尾を吊り上げて、悲鳴をあげない、全然怖がらない強気の子犬を良い猟犬になれると見込む。一つの巣穴から最後に生まれたあるいは体重が一番軽い、しかもほかの仔犬の上に横になって一番初めに目を開けた子犬をモンゴル人は好んで飼育する（W. sayinčoytu 2000:42）。

体が小さめ、動作の速い子犬は将来狐をつかむ良き猟犬になれるという。そして、体が大きめ、口先の大きい、胸が発達している仔犬を将来狼狩に使うのである。また尾の長い仔犬は方向転換に良いが、その逆は方向転換の時、よくつまずく（W. sayinčoytu 2000:42）。このようにモンゴル人は子犬のそれぞれの持つ特徴に合わせて狩猟技術を習得する。猟犬を牧畜生活に十分に利用するすべはモンゴル人の動物、自然生態への深い認識の一つの表れだと考えられる。昔、ニーマさんも猟犬で狼を数頭狩った経験があるという。よく馴らされた犬は狼との戦いで負けた格好をして、わざと狼をアンチンの射撃範囲へ誘導するなどの戦略ができるとニーマさんは教えてくれた。

馬と犬をほめたたえることは牧地区地域に住むモンゴル人の日常話題の一部である。牧畜民の会話にはことわざがたくさん織り込まれる。犬と狼だけと関係ある諺をいくつか挙げてみよう。『犬良ければ、門戸が安全（noqai saitū-in qota bardam）』、『良き犬のいるところ、狼は現れない（noqai - in sain du činu-a ūgei）』、『ホト^⑪に狼が入れられた犬は二十日間も悔しがる（qotan daran činu-a orurūlugsan noqai qorin qonug ruraitadag）』などなど多くある。このような諺の発生にはモンゴル人が生きた牧畜生活そのものが母体となっていることは明らかである。

2. 仔狼をとる (belterge cyilaqu)

春の始まる頃、多くのモンゴル地域では狼をとる作業が始まる。かつて、このような作業はアルホルチン地域でも同じように行われていた。現在は狼と狼の餌となる野生動物はほとんどいなくなっているが、解放初期（1950年代頃）までは、ソム、ガチャーは仔狼をとる作業を数多く行ったことがある（2003年8月調査日記。ニーマ氏、ノルソソジヤムソ一氏との談話から）。

実際、狼の生理上、最大の特徴の一つは多産である。一般的に言えば、狼の寿命は12-13歳前後だと言われている。モンゴルのアンチンの観察によれば牝狼は一生7-8回ぐらい出産することがあり、一回6,7頭の仔が生まれる。多く生まれる場合は12頭も数えられるほどである。（Т・Наранхуу 2002:24）。

狼の多産を放任し、人間社会からの一切の干渉がなければ、狼の数は爆発的に増えるに違いない。モンゴルの牧畜民は狼と隣り合って生活する長い歴史の中では、狼退治および狼の頭数制限に多くの適切かつ有効な策略を実行の中で続けてきた。その中、仔狼をとる作業は狼の頭数制限に一番成功した方法だと言えるだろう。

アルホルチンの人々は各自の放牧地であるノタククを含めた広範囲で狼の動向を観察し、その洞穴の場所を大体特定してからこの作業に出かける。自発的に数人で行く場合とアンチン一人で行く場合がある。また、狼の出産ばかりの洞穴を発見した場合、経験深いアンチンなら独自で仔狼をとって帰ってしまう場合もある。通常、狼の洞穴は地勢によって穴の形、深さは様々である。仔狼の生後の穴生活はおよそ40日間つづく（Т・Наранхуу 2002:108）。この間の仔狼をモンゴル人は *belterge*（若い仔狼のこと）と言い、この時の *belterge* は穴から出て、太陽に当たったり、遊んだり、周囲の環境と馴染んだりするのが主な日課である。その内に秋がやってきて、狼の群れ生活が始まる。これまでの仔狼を *jolja ya činu-a*（仔狼のこと）と言う。秋以後、群れ生活に鍛えられる仔狼を *gülügen činu-a*（仔狼だが独立能力を身に付けた狼のこと）と呼ぶ。

仔狼をとるといふ牧民の行為に対象とされるのは *belterge*（若い仔狼のこと）である。人々は親狼の狩りに出かけた合間に洞穴から仔狼を取って帰るのである。取り方は洞穴の形、深さによって手をつかむか、餌で騙しておびきよせてつかむまたは、煙で燻すなどいろいろあるが、最後は一頭を必ず穴に残すのがモンゴル人の昔からのやり方である。そして、若い仔狼を取れば、狩人は去っていく。人間によって洞穴の荒らされた様子を見た親狼は危険を感じ、残された唯一若い仔狼を口に噛んだまま遠くまで行ってしまふ。ニーマさんの表現を借りれば、「仔狼を噛んだ親狼は一晩にして、いくつかの旗の境をわたって行ってしまふ」とのことである。

しかし、いくら人間が狼の洞穴を荒らして、仔狼までとっていても、狼に怖がる人間の心理は今や昔は差ほどの変わりはない。その例には、狼を取って帰る人は足跡をそむけて家に入らなければいけないという儀礼的な呪術行為は人々に守られている。というのは狼に足跡を追われて逆襲されるのを防ぐためだと言われる。狼のあまり見られなくなったアルホルチンでもこの慣習は人々の記憶の中にハッキリと残されている。洞穴から捕らわれてきた若い狼は、皆殺されるとは限らない。稀であるが *gülügen činu-a*（仔狼だが独立能力を身に付けた狼のこと）まで育てることもモンゴル各地でしばしばある。その期間狼と犬を交尾させて、より獠猛な犬の種を得るために試みられる場合もある。*gülügen činu-a*（仔狼）の期間が終われば、殺してしまうケースが多いそうである（2003年8月調査日記。ニ

一マ氏、ノルソンジヤムソー氏との談話から)。

以上概観したように、若い狼の少なくとも一頭を洞穴に残すことは狼の種を絶滅させないこと及び生態中の狼の数的バランスを配慮した牧畜民の考えであることは窺えよう。しかも、このような作業はアルホルチン地域を含むモンゴルの世界では牧畜生業の必要から生じた普遍的なやり方でもある。牧畜生産とそれを可能にする草原生態の良性循環を保持するモンゴル人牧畜民の暮らしの知恵であつたことは言うまでもないであろう。

3. 挟みわなを用いて狩る (qabqadaqu arya)

「わな」を用いて獲物を仕掛ける方法は世界の多くの民族の生活誌によく見られる「狩人はわなにかかる」という日本の諺があるように、日本にも狩に「わな」が用いられた。

アルホルチン旗での調査では狩猟に使われていた「わな」の実物をハンースム・ソム、フブガチャーのノルソンジヤムソー氏の家で見た。氏の家で狼狩用のわなと兎狩用のわな二種類を見た。全て鋼鉄製のものだった【写真 2】。その中、狼狩用のわなが三つあり、大きさには差ほどの差がなく、挟みの内面部分だけに三つずつの鋭い歯が付いているものと付いてないものがあつた。挟みの部分に歯が付いていることは獰猛な狼が脱け出すことを防ぐためのものであるとノルソンジヤムソー氏は語つた。

また、ニーマ氏も 1950 年代、自分が使つていた狼狩用の挟みわなの形態を紙面にスケッチしてくれた(図 3)。挟みわなには、実際に見た基盤の円形なもの以外長方形のものも存在したことがわかつた。

このようなわなを使つてニーマ氏は五頭の狼を獲つたことがある。氏は専門のアンチン

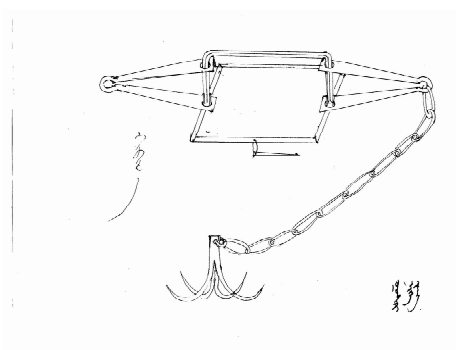


図3 ニーマ氏にスケッチしてくれた狼狩に使われた挟みわな（2004年8月アルホルチンにて）

写真2: 挟みわなを手に持つノルソンジヤムソー氏（65歳）

ではないが彼の父親が狩猟の優れた人だった。彼自身も一般の人より狩猟が好きのようだ。ニーマ氏が1950年代挟みわなを使って狼を狩り始めたことには次のような背景があった。彼の記述によれば1947年、社会主義民衆大革命が盟、旗、ソム、ガチヤ各行政範囲で実施された。やがて盟、旗から工作隊が派遣され各ガチヤーで革命運動を起こした。彼らは群衆大会を開き、貧困大衆の中から革命の積極分子を選出した。その後戸籍ごとの家系の家柄選別を行った。ニーマ氏の父親は元王府の役人、しかも軍関係の重要人物だったことでニーマ氏は「富牧主」の家系とされた。

当時、中国内陸では人々は貧農、中農、富農、地主の階級区別をされた。多数を占める貧農は無産階級革命の基本動力、国家の主人公とされた。中農は革命の団結勢力とされた。そして少数を占める富農と地主または旧社会の社会上層の、高官、役人、僧たちには社会主義改造が強いられた。彼らの財産である住居、農地、金銀装飾品から生活道具まですべてのものが人民政府に没収され、後に貧農大衆に再分配された。ニーマ氏は「富牧主」とされたのは、このような中国内陸の「土地改革運動」の延長線にあった「牧畜地域版」の影響下でのことであった。その時、ニーマ氏も住居であるゲルから家畜まですべてを人民政府に没収された。そして、その没収された家産が人民大衆に再分配された。その代わり、ニーマ氏は一軒のボロボロになったゲルと生活最低限の食料と老いたロバ一頭だけを再分配で得た。このようにして、ニーマ氏が一家四人の生計を一頭の老いたロバと供に辛抱つらく生きることとなる。

ある夜、狼による事件がニーマ氏の住むガチヤーでおきた。ガチヤーの家畜が狼に襲われて損害が出た。その数日後、ニーマ氏の老いたロバも狼に食われた。ガチヤーの人々の噂によると、狼は極めて頑丈な体格をして、人間に恐れず、老成したものだったそうだ。ガチヤーの幹部たちは革命運動に熱心だが狼退治には苦手のように、狼の放浪をそのまま容認していた。ニーマ氏は狩りの経験があったため、狼退治を自ら申し入れ、ガチヤーから狼退治用の挟みわなを借りた。ニーマ氏はロバの死体を片付けずに、死体のそばに挟みわなを設置し、狼の再来を待ち続けた。モンゴルの言い伝えによれば、狼は食い残しのところに再び来ることもあるという。何日も待ち伏せた結果、言い伝えが現実となり、狼は挟みわなにかけられ、ロバの死体のそばで捕えられた。

このような経緯で狼は退治され、ガチヤーから借りた挟みわなも長期間ニーマ氏に保管されるようになった。後に、この挟みわなを使って氏はまた狼何頭と、多数の黄羊を捕まえた。中国一般の人々にとって、苦難に満ちた時代とされる建国初期の1950~60年代あたりでは、ニーマ氏は時に山に入り黄羊の密猟を行い黄羊肉での生計を保持した。黄羊の密猟によく使われたのはこの挟みわなだったというのだ。

アルホルチンでは狼を狩った人は狼の皮をジュルト⑱と共に狼の収穫として戴く。肉に毛を一つも残さないよう細心に解体する。そして四つの枝体をバラバラにして、それぞれ四つの方向へ捨てる。最後に胸腔に大きい丸石を入れて遠いところに埋めてしまうのである。このやり方は、狼の霊が肉身に復元し、さらに『修行』をして、地元を害する悪精霊へと生まれ変わることを防ぐ呪術的な行いであるという【2003年8月 調査中・ニーマ

の語り】。

事実、アルホルチンでは動物の中で、狼と狐を殺したら、死体のまま家に持ち帰ること、または野外に放置することがとても忌避されている。というのは狼と狐は死んだらその魂が容易に人々に害をおよぼす妖怪や悪精霊となるという俗信があるからである。魂の肉体への復元を防ぐ行為は、その肢体の分解処理に呪術の意味が含まれていると考えられる。または、モンゴル人は古来、狼と狐の皮を使うが肉は食べない。皮を使うためことごとく皮をはぎ (bitegüü ber öbchij)、干した草を皮の中に入れ、高いところあるいは木の枝に掛けて干すのである。これを činu-a in tug bosqaqu (狼旗を掛ける) ともいう。

4. 遠吠えで誘き寄せて狩る (olin dayudaju angnaqu arga) *

狼と同じ自然環境に生きてきた経験からモンゴル人は、実に狼について詳細な知識を持っていた。狼の居場所を探索するため mür sinjiqū¹⁹ (足跡を観る) 方法は発達した以外狼の遠吠えを真似して、狼を誘き寄せる奇異な方法もよく使われた。遠吠えの場合もいろいろなパターンがある。狼の遠吠えには長い、短い、大声で始まって細い声で終わる、またはその逆、そして、悲鳴、寂しいなど様々な感情を伝えた吠え方がある。経験豊かな獵人は狼と『会話』を交わしているように狼と交信し合つて、最終的に狼を誘き寄せて狩る。獵人は狼の遠吠えで狼の位置と狼が個体でいるか、群れているか、あるいは、それは雄か雌かを知ることができるという。遠吠えの真似をし、狼を誘き寄せようとするには獵人は、狼の来れそうな場所にいなければならない。障害のない平らなところには狼は絶対来ない。一般に、ちよつと障害物のある場所がよいとされる。しかも最初の遠吠えを風向に沿つてする。すると周辺に狼がいれば必ず返事をくれるという。二、三回狼と『会話』を交わしたら、最後の遠吠えを逆風向へとする。ここに訳があるという。それは、狼が自分の行こうとしている方向にしか遠吠えはしない習性があるからだ。そして、獵人の遠吠えにはなるべく「あなたは来て、私はほかのところに行くかも」とのメッセージを織り込まなければならないという。これは我々、素人にとって、信じ難いものだが結果的に往々、狼は一つ返事を上げて、静かになってしまう。そして、狼が獵人のいる場所を向いて来るのが紛れもない事実となる。獵人にとってその時は、銃撃の準備をし、寝て待つだけなのだ。

狼は、群れている場合、リーダー狼は往々に高所に登り、遠吠えをした獵人のほうへ移動するほかの狼の後姿を見守る。様子がおかしかったらリーダー狼は遠吠えをし、直ちに、群を呼び戻せる。狼の群れの中では、厳密な順位関係が存在し、支配と服従の関係が確立されている。狩りも戦略的に行えるような賢い獣である。

モンゴルの牧民がよく「狼に一度声を覚えられたら、再び狼は騙されない」という。遠吠えの方法で狩りをする獵人が一つの地域で長年は勤まらないのもそれが原因である。

飼犬が遠吠えをすることをモンゴル人は悪い兆候と考える。放牧地で子供の悪戯でした遠吠えは、いつも大人から厳しく叱られる。(Хатагин Готовын Аким 2002:117)。これらは牧畜地域での常識である。

* (4) を文章化するに当たって Хатагин Готовын Аким 氏の研究を主に参考した。(4) に示された狩猟方法はかつてアルホルチン地域およびほかの広域に使われていたことが多く確認されている。筆者が 2004 年 8 月のフィールドワーク中、

アルホルチンのハーンスム・ソムの前クブーガチヤの牧民ノルソンジヤムソさん（65歳、写真2）をインタビューした際、彼は肉声の狼の遠吠えや野生ウサギの声やゴルゴル（駝鳥）などの泣き声の真似をして見せてくれた。筆者はその録音も行った。氏の話によれば狼と野生ウサギとゴルゴル（駝鳥の一種）を狩る時上述の方法が用いられるが、猪と狐などには通用しないとのことである。

（四）狼狩と狼の激減

今日、内モンゴルもまた世界の多くの地域同様、狼は滅亡寸前の状況である。内モンゴルでは年配の人々にとって1950年ころから始まった狼撲滅運動は記憶になお新しいものである。この狼撲滅運動は1950年代から1960年代中頃ぐらいまで続けられたそうだが（1990年代までという異説もある）。しかも、政策によるものだったと牧民達は証言する。この運動でどれぐらいの頭数で狼が殺されたかは、現在のところ詳細なデータがなくわからないが、内モンゴルの範囲内では、当時、人間の至るところには狼はほとんど見られなくなったという供述が多く得られた。またある一部の人は狼が北へ国境を越えモンゴル国に逃げ込んだという。いずれにせよ、滅狼運動以来、内モンゴルのほとんどの盟、旗、県には狼が見られなくなったのが事実に近いようである。

一まずここで、アルホルチンの1950年代の狩猟状況を振り返る必要がある。Aruqurčın Qusiyun-nu Uyilalya（『アルホルチン旗誌』）には当旗の1950年以後の狩猟状況を記したものがあ。原文の日本語訳（筆者訳）は次のようである。

「解放前（現在の中国の行政地域に編入される1949以前を指す）、アルホルチン旗では全旗規模の大狩猟は一度もなかった。解放以後、1951年の6月に旗の政府が旗の南部の各ガチヤ、区を組織して、holboya in jou（フオルボーのジョー）で巻き狩をして、一回で千頭以上のカモシカを獲った。このような狩はまた何回か組織され、狩ったカモシカの頭数は一万頭も超えた。狩ったカモシカの肉をボルツァ²⁰にして『抗美援朝』の戦争に支援した。1950年から牧畜民は家庭ごとで獵馬と獵犬を持つようになり、個人あるいは組織で狩猟に出かけることが頻繁になった。1960年になるとアルホルチン旗の南部では野生の動物は姿を消した。その結果、当該地域の狩猟は取りやめられた。1980年代までは、アルホルチン旗の北部の牧畜地域でのみ9～12月の間、狐、狼、猪の狩りが小規模ながら行われていた。狼狩はガチヤあるいはソムで牧畜民を組織して行っていた」。

以上の記述の中で、アルホルチンでは解放後の1951年6月から急に大規模な狩猟を始め、それをまだ何回か繰り返したと、その狩猟の獲物を『抗美援朝（1951～1953）』の戦争に支援したという二点は注目すべきである。

『抗美援朝（1951～1953）』は、新しく建立された中国が、アメリカの脅威を朝鮮半島から追い出すための対外戦争であった。内モンゴルは中国行政地域の一部として、当然国内他省同様、国家の戦争を人力と物資で支援しなければならない立場だった。上文から内モンゴルは自分の保有する天然資源である野生動物達を『大量献上』したことが窺える。つまり、前線への食肉援助である。その需要を満たすため1950年以後、内モンゴルの狩猟は伝統、しきたりを破り、乱狩が横行するようになったと考えられる。アルホルチン旗では1960年までの短時間で、一部の地域では野生動物は完全に姿を消すまでに至った。そして、援朝戦争へ運ばれなかった狼の運命はどうなったのだろうか。野生動物の激減＝狼の獲物の激減であることを我々は自然に推測できよう。それは狼の生息には致命的な打撃を与え

たに違いない。野生動物の獲物が見つからない時、狼は人間の管理下にいる家畜を襲い始めた。狼に家畜をたくさん殺されることを草原では昔から「狼害」というが、1950年以後は状況が一変し、狼の存在自体が『狼害』であるほどなった。狼と人間の敵対関係が「狼害」の増すことにつれて成立したと考えられる。

1950年代、政府行政部門は狼をなくすことで「狼害」問題に終止符を打とうと明言した。内モンゴル自治区政府は狼を「家畜の敵」と見なし、狼害をなくすことを牧畜経済の一環とし、内モンゴル全地域で狼の撲滅を推進した。ニーマ氏の回想によれば、当時のナーダム大会において、文芸宣伝隊による「打狼舞（狼撲滅をテーマにした踊り）」の熱烈な演出を伴い、狼を多く撲滅させた単位や個人を労働模範として賞していた。その中、アルホルチン旗では、バヤンウンデルソムのArdaa氏、Arbantabun氏、Boldurvar氏とハーンソムのĜoijizalsan氏などは有名な狼の獵人だった。政府が用意した賞品には、奨状、挟みわな、heb-in čai（レンガお茶）そして獵犬のエサまでであった。これは狼撲滅運動である。漢族の人に「打狼運動」、内モンゴルのモンゴル人にはČinu-a usadqaqu ködügegen（狼撲滅運動という意味）と言われた。

このような自然と動物に対する一方的な偏った認識こそが自然の破壊につながり、貴重な動物の滅亡に拍車をかけた要因ともいえるべきであろう。さらに、アルホルチン以外、かつてmingan aba（千人の大獵）もしばしば行なわれていた内モンゴル西の地域オルドスでは、ガゼルは1958年ころから絶滅、オオカミも1960年代にはいつてからまったく見られなくなった。大量の漢族の流入で草原の生態が破壊され、動物たちの棲み家がなくなったことと解放軍の乱獵がその原因である（楊1994: 391）との指摘さえもある。

周知の通り内モンゴルではアルホルチン旗のような旗は49もあったので同じことが全内モンゴルで起きたと考えれば、今日の内モンゴルが直面する狼も含めた野生動物資源の貧しさは、決して理解できないことではない。

五、終わりに

以上、内モンゴルの激動な時代を生き抜いてきた牧民ニーマ氏の人生のエピソードと結びつけながらアルホルチンの狼狩風習を概観してきた。

本稿では文化人類学の視点から、文献と現地調査の両面で得た情報を照らし合いながら、少なくとも、つぎの三点を明確にした。

(一) 調査地域である内モンゴル自治区赤峰市（元ジョウオダ盟）アルホルチン旗でかつて行っていた狼狩の内容を聞き取り調査によって再構築した。その際、動態的狼狩の行動の中、狼を神聖視するモンゴル人の従来の狼観が儀礼的なやり方によって巧妙に貫かれていた。いわば、モンゴル人の狼を神聖視する観念は精神世界のみには存在するのではなく、現実の生業の中まで根強く生きていたことが示唆された。

(二) 狼狩を含む狩猟風習は、一般的に、経済生産の一副業的特徴とモンゴル人男性達の、ハードな牧畜業生産から短期間に開放される娯楽的特徴から解釈されるのが多い。しかし、今回の調査を通して、以上の特徴が見られる一方、狼狩そのものが草原に住む人々の生態バランスを維持する必要性から生まれた科学的な生態意識に富んだ風習でもあった

側面がはつきりと窺えた。例えば、3, 2 の(2)にある仔狼をとる (belterge cyilaqu) 中の仔狼の一頭を必ず放生してやる行為は以上の観点を十分証明できるのである。

(三) 1950 年以後、内モンゴルではモンゴル式な生活スタイルを維持していくのが難しい状況となった。これによって、従来の自然環境に配慮した狼狩を含めた狩猟風習をモンゴル人の伝統生活、文化習慣に沿って、しきたり通り正しく行なえたのは 1950 年代までと言い切っても無理はないようである。

注

①činus は古代のモンゴル系の一氏族である。(D. Sodnam 1987: 331) に参照

②Sa・Sampilnorbu 氏が長年にわたって民間で採集した諺は、彼の死後、原稿が整理され、正式に出版された。それは彼の生前の友人や故郷の人々の支援によるものである。筆者が参考したのは (Sa・Sampilnorbu2002) である。

③赤峰市は旧ジョウオダ盟のことである。1983 年に改めたものである。

④天山鎮は、現在のアルホルチン旗の政府所屬地。モンゴル人は「qibaga ingai」と呼ぶ。「gai」は「街」を意味する漢語のモンゴル式諧音である。天山鎮の大元は 1926 年に設置された『天山設治局』である。この『天山設治局』とは、1908 年に設置された開魯県の管理するアルホルチン旗と東・西ジャロード三旗南部のシャラムレン (西拉木淪) 河沿岸地域の肥沃な牧草地の開墾を拡大し、それがさらにアルホルチン旗内に及んだ結果、1926 年に新たに設置された開墾を管理する機関である (ボルジギン・ブレンサイン 2004: 43)。

⑤1998 年以後、内モンゴルでは『砂嵐』と称される異常な気候現象が頻発するようになった。その影響は、すでに砂漠化された内モンゴルの自然環境を最も悪化させ、南の北京もその脅威にさらされるようになった。民間人の話によると、このことがきっかけで内モンゴルの砂漠化問題は北京にある中央政府に重視され、『砂嵐』防止のための砂漠治理と緑化が本格的に政府の議事内容となった。その一環として、草原の砂漠化は牧畜民による過放牧が原因の一つと見なされ、牧畜民を元住地域から移住させる国家プロジェクトが行われている。これが所謂『生態移民』政策である。内モンゴルの近現代における農村村落社会の形成を研究したボルジギン・ブレンサイン氏の指摘によれば、内モンゴル範囲内では、「砂漠化問題の根源には開墾問題があると考えています。農地の荒廃はもとより、過放牧現象の背景にも開墾問題が存在しています。また度重なる政策の過ちがあり、それに対する評価や反省は全く見られません。更に、自然資源の略奪的な経営も重要な原因の一つです」(ボルジギン・ブレンサイン 2002: 22)。

⑥『牧畜の圈養』は、モンゴル語では qasyalan malalqu という。アルホルチン旗の場合は、当該地域の草の状況によって一年中の『牧畜の圈養』期間がそれぞれ異なる。同旗の南の地域にあるジャガスタイ・ソムの牧民ジャルガル氏の場合は、牛が 40 頭ぐらい、羊と山羊を 300 等ぐらい飼っているが、彼のソムでは 1 月 15 日から 7 月 15 日までは圈養期間となっている。しかし、圈養の期間があまりに長かったため、氏は、家畜の多数を追って、隣りのジャロード旗の友人の草場を借りて放牧を行っている。

⑦2004年3月の調査にて、アルホルチン旗の坤都鎮では、『生態移民』を受け入れるため、設計の全く同じ赤レンガの中国式家屋がたくさん建てられているのを見た。中には、すでに住み始めている家庭もあり、彼らに乳牛だけを飼わせていることから、内モンゴル新興乳業企業の鮮乳基地の戦略が彼らの身においても試みされているようである。

⑧アイルは基本的に牧畜民の一世帯で構成する家庭のことを指すが、現在は、いくつかの世帯からなる集落的単位にも「アイル」は使われるようになった。

⑨タイジはチンギス・ハーン一族の血を引いた子孫が受けられる名称。

⑩徳王（1902-1966年）本名テムチョックドロンローブ。蘇尼特右翼ジャサク和碩親王内モンゴルの近代歴史における王公出身の自治運動のリーダー。

⑪アルホルチン旗で歌われる民謡・「ゴシンの歌」にはゴシンのように出場している。

旗衛門のなかで / 名を馳せるゴシンガ / 十万の民を統べる / 団長と呼ばれるゴシンガ

六つの旗衛門では / 無敵の存在のゴシンガ / 九万の民を統べる / 団長と呼ばれるゴシンガ

この歌は、このような声名と身分を抱えたゴシンガ氏の、1936年、アルホルチン旗で徴兵を集め、西モンゴルを出発する際の様子を記述している。歌の中、ゴシンガ氏はアルホルチン旗の慈恵豊かな三人の活仏へ戦死する命を拝み、たくさんの年輩や若者の見送りを受け、さらにアルホルチンの旗王をはじめ、かどでの花言葉まで送られているシンがある。(A. Quturung □a 2005: 263) によれば、ゴシンガは百名あまりの兵士とともにアルホルチン旗を離れ、バリン左旗のチンジョリクト氏の部衆と合流し、総兵力は500名兵士と軍馬200頭位となり、1936年10月に西モンゴルドロンノールに着いた。そこで徳王の蒙古自治軍、第8師の第24団と編成された。チンジョリクト氏とゴシンガ氏はそれぞれ団長と副団長に任命された。

⑫ ^{ハーン・スム} 罕 廟 (戴恩寺) は1674年清朝康熙帝の勅令によつて再建させられたチベット仏教のラマ廟である。

その前身は(祥樂寺)であつて、北元朝・モンゴル最後の皇帝リンダン・呼図克図・ハーンの建立した大ハーンの家廟であつたとの説が近年において最も有力になつている。清朝時代に入つてから ^{ハーン・スム} 罕 廟 (戴恩寺) は、主に旗下24の廟に対し行政職能を有する寺廟として知られる。廟は殿堂9棟、僧房100軒余からなり、1947年まではラマ僧500人位は常住していた。1950年代中頃から中国社会主义政治運動によつて、ラマ僧は強制的に還俗させられ、1966年文革初頭に廟舎は酷く破壊された。1980年代中国の宗教政策が緩められることによつて、法事は再開され、寺廟の再建、復興もゆつくりだが進みつつある。

⑬ ^{ハーン・スム} 第八世察汗達爾罕呼図克図は ^{ハーン・スム} 罕 廟 (戴恩寺)、北京黒寺、ラシセ一廟を本法場とする活仏。当該系譜の活仏は清朝内宮における八人の大呼図克図の一人である。この八大呼図克図は四大最高位転生ラマの一人章嘉呼図克図に加ふるに ^{ガルダンシレト} 葛爾丹錫例呼図克図、^{ミンジュール} 敏珠爾呼図克図、^{ジラン} 濟隆呼図克図、^{ナムハ} 那木喀呼図克図、^{アジャー} 阿嘉呼図克図、^{ラホア} 喇果呼図克図、^{ツァガンドルハン} 察汗達爾罕呼図克図になる。文中出現する第八世察汗達爾罕呼図克図(1876

-1943年)になる人物はかつて満州国興安総省におけるラマ宗団団長の肩書を持ち、その任期中、日本を訪問したことがあると文献資料は伝えている。詳細なことは明らかになつてないが、アルホルチン民間では、何人ものモンゴル人僧侶を仏教留学で日本高野山に派遣したのも当該系譜の第八世活仏の所為との説がある。詳細は『赤峰人物誌』および、モンゴル文、『第五世雲僧活仏ジャムヤン作品選』参照。

⑭bilaru(ボロー棒)とは棒の先に金属の球を繋いだ狩猟の道具である。(写真6)に見られる牧畜民が手に持った道具。過去、アルホルチン旗では牧畜民の各家庭に必ずしもあつたものである。

⑮狩猟に伴う儀式では『ang-in sang(狩猟の呪文)』を唱えることが諸儀礼の中で最も重要視される。このang-in sangはラマ僧に唱えてもらうものではなく、獵人の俗人達は集団あるいは各自で唱えて行なうものである。モンゴルでは大規模の狩猟になると『manaiqan tegri(マンナイ・ハーン・天)』を祀つて、大自然の山々やオポー(小さい丘)などにčaran baling(乳製品の供物)を捧げ、ハイマツの枝を燃やしてdalalara(招福)の呪文を読み上げる。その際の呪文に次の内容のもの(楊1994:390)がある。

.....

上天より大地を見おろすマンナイ・ハーン・テングリよ

われわれの祈りに耳を傾けてくれ:

あなたの食べきれない動物をください

話を聞かない動物をください

放牧できないハンダガイー(伝説上の巨大なウシ)をください

群れにならない青きオオカミをください

管轄を無視する黒いクマをください

曳綱になじまないキツネをください

アーアー、万種の動物をつかさどるマンナイ・ハーン・テングリーよ

ホリー! ホリー!

.....

⑯ユールとはモンゴルの口承文芸における一つのジャンルで、祝詩のことを指す。モンゴルの牧畜儀礼や風習を凝縮して表現する、儀礼の場で唱えられる一種の口承詩である。象徴的な言葉で物事の未来を祝福する。また歌と若干異なる一定のリズムを持ち、唱える時にも多少のパフォーマンスも伴うことが指摘できる。(ボルジギン・N・オルトナスト2003:1)

⑰ここでホト(qota)とは牧畜地域における家畜の棲む場所を指す。牧畜地域では『qota-n mani』という言葉はよく使われる。つまり家畜の圈を含めた家の周辺を守れという意味である。都市の住民にとつてqotaは町、都市を指すのが一般的である。

⑱ジュルトは動物の舌、首、心臓、肺の付いた部分のことを指す。モンゴル狩猟のえでは、ジュルトには

動物の魂が宿っているという。ジュルトは狩猟の福を象徴していると理解されている。

- ①9 mür sinjiqū 方法は家畜や動物の残した足跡や痕跡を当該動物の生活の習性と結びつけて当該動物の行先や身体的特徴を判断する遊牧民の『探偵法』である。遊牧民はこの mür sinjiqū の知恵を用いて主に家畜（五畜）の探索や狩りによく利用する。この mür sinjiqū はかつてのモンゴル遊牧社会では、一般遊牧民や獵人達に熟知されたものであつた（その詳細を（qadai 1964）に見ることができる）が、現代になってこのような口で伝わる知識がモンゴル人の間ではだんだん失われている。その理由に、モンゴル人の伝統的生活様式が変えられたからだという指摘が多い。例えば（W. sayin□oytu 2000:14）、（Ra・Süke2002）などがある。

- ②0保存しやすいように干した家畜の肉をボルツァという。

参考文献（年代順）

- [1]Qadai. Činu-a abulaqu arra tursilra（モンゴル文、『狼狩の経験と方法』）[M]. 張家口：内モンゴル人民出版社, 1964.
- [2]D. Sodnam. 中国における歴代部族の略詞典[M]. モンゴル文, 呼和浩特：内蒙古人民出版社, 1987.
- [3]C. -C. & G. ラガツシユ. 狼と西洋文明[M]. 高橋正男訳, 八坂書房, 1989.
- [4]モンゴル文、『モンゴルにおけるシヤマニーズム祭祀文化』[M]. 海拉尔：内蒙古文化出版社, 1991.
- [5]間野英二, 中見立夫, 堀直, 小松久男. 地域からの世界史[M]. 第6巻: 『内陸アジア』, 東京: 朝日新聞社, 1992.
- [6]楊海英. モンゴルの集落生活と官員の来訪 - 網絵に見る清朝時代のオルドス・モンゴル- [J]. 民族学研究, 1994, (4). 382 ~ 393.
- [7]エリック・ツイメン. オオカミーその行動・生態・神話[M]. 今泉みね子訳, 東京: 白水社, 1995.
- [8]Oriyangqan. Jou. Altangerel. Mongγol Oboγ Aimaγ-yin Temdeglel（『蒙古族姓氏録』）[M]. 蒙漢文版, 赤峰: 内蒙古科学技術出版社, 1996.
- [9]アルホルチンの山水[M]. モンゴル文, 通遼: 内蒙古少年儿童出版社, 1997.
- [10]Nrantuyaya. モンゴル文、『モンゴルにおける禁忌儀礼』[M]. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社, 1998.
- [11]Temdeg-yin soyul(符号の文化) [M]. モンゴル文, 北京: 民族出版社, 1999.
- [12]赤峰人物, 赤峰市政协文史委员会編. 赤峰人物[M]. 北京: 文史出版社, 1999.
- [13]Х а т а г и н Г о т о в ы н А К И М. 天神の犬 - 蒼きモンゴルにおける蒼き狼についての真実と神話 - [M]. ウランバートル, 2000.
- [14]Т . Н А Р А Н Х У У . М О Н Г О Л Н У Т Г И Й Н Ч О Н О（『モンゴルの狼』）[M]. ウランバートル, 2000.

- [15] バー, ボルド. 狼とカシ - モンゴル相撲における再生儀礼に関する一試論 - [J]. 和光大学人間関係学部紀要[C]. 2000. 6.
- [16] R. Süke. モンゴルの民俗および生態環境[M]. モンゴル文, 呼和浩特: 内蒙古人民出版社, 2002.
- [17] Se · Sampilnorbuu. Mongγol jyir sečen yge-yin čuglaran (モンゴル文『モンゴル語の諺語集』) [M]. 北京: 民族出版社, 2002.
- [18] ボルジギン, N・オルトナスト. モンゴルにおける種馬に関する儀礼をめぐって - 種馬に関するユルールを事例に - [A]. 千葉大学ユーラシア言語文化論集[C]. 第6号, 2003, 1-18.
- [19] A. Quturungra. Aru qurqin rurban jarun jil (モンゴル文、『アルホルチン・300年』) [M]. 呼和浩特: 内蒙古人民出版社, 1997.

Relationship between Mongol Herders and Wolf as Seen in Wolf Hunting Custom: Based on Fieldwork Conducted in Arhorchin Banner, Inner Mongolia

Namjilin Bold

(College of Mongolian Studies, Inner Mongolia University, Hohhot, Inner Mongolia)

Abstract: Wolf has disappeared in most parts of Inner Mongolia in recent years. Consequently traditional custom of hunting wolf has vanished as well in the region. This paper, based on interviews with Nima, an old former hunter in Arhorchin, ethnographically describes Mongolian culture in hunting wolf. The culture included Mongolian feeling of worshiping wolf as sacred animal, and point of view of hunting wolf as important means to balance ecology in Mongolian Plateau. The author thinks that eradication of traditional custom of the hunting in 1950s was resulted in destruction of wildlife resource in today's Inner Mongolia. Especially it was one of direct reasons for extinction of wolf in the region.

Keywords: Hunting wolf, Hunting custom, Arhorchin

原稿受取期日: 2005-09-20;

執筆者紹介: ナムジリン・ボルド 一九七三年生まれ、男性、内モンゴル-アラシヤン盟出身。大阪外国語大学大学院博士前期課程修了、学術修士。現在、内モンゴル大学モンゴル学院にて助手を務める。専攻は文化人類学。